

4月 月例研修会

笠置山(笠置寺)ハイキング・花見・レポ

千載 輝重

春爛漫の4月6日(火)9:45、老若(?)男女15名が笠置駅に集合。汗ばむ好天の中、一路笠置寺を目指して出発。標高289mの小山ではあるが、登山道は1kmでかなりの急こう配を一気に登ることになる。それでも途中に、ウラシマソウ、マムシグサ、ギンリュウソウ、キランソウ、ヒメツメグサなど、山道らしい草花に足を止めながら、落伍者なく40分で到着。

事前をお願いしていた、前住職小林さんに従って礼堂(本堂)に向かう。目の前に現れるの



は高さ20mのとてつもない巨岩。弥生人たちにとって、まさに神の仕業にしか見えなかっただろう。本尊弥勒摩崖仏の麓から弥生時代の石剣が発見されたので、この時代から信仰の対象であったことは間違いないらしい。そして巨大摩崖仏はどのようにして彫られたのか。『天智2年(664年)「天人下りて仏を成す」』との文書が残されているらしいが、実際は渡来人によるものだとのこと。巨岩信仰、磐座信仰に仏教が一体化したのは、奈良時代の神仏混淆の現れなのかなあ、と勝手に推量した。

奈良時代～平安時代の全盛期にはかなりの伽藍が山中に展開されていたらしい。ところが元弘の変で倒幕を目指した後醍醐天皇の味方をしたばかりに、北条軍に攻められ攻防1か月で全山焼亡。礼堂を燃やす炎は巨岩の表面を焦が

し、本尊弥勒摩崖仏も光背の跡形を残すのみとなった。近年、炎で消えた摩崖仏が光学的に分析され再現され、月光のもとに撮影された美しい姿が礼堂に飾られている。

少し進むと巨岩に挟まれた千手窟がある。もともと山岳信仰の修行場であり、南都仏教とともに栄え、東大寺との交流も深かった。実忠和尚が雨ごい祈念のために窟に向かって念じていた折、突然に岩が崩れて穴があき、光明に誘われて穴を進むと兜率天^{とそつてん}での仏による悔過法要が営まれていた。これを人間世界で行うべしと決心し、始めたのが現在東大寺二月堂に伝わる修二会であり、その初回は笠置寺の礼堂(正月堂)であったとのことである。

次に現れるのは炎の洗礼を受けずに今も残る巨大摩崖仏(伝虚空蔵菩薩)で、その姿をきれいに残している。拓本がとられ掛け軸として京都のとある体育館に保管されているが、大きすぎて飾られることがないらしい。小林さんとしては何とかJR奈良駅あたりで飾れないだろうかと念じているとのこと。

年齢85歳とも思えない声量と軽妙な語り口で、笑いあり感心するところありで楽しい案内であった。

胎内くぐり、ゆるぎ石、山頂からの木津川の眺望に感嘆しつつ、行場をめぐり、後醍醐天皇行在所跡を経て下山。

飲み物を仕入れて少し遅い昼食。晴天のもと清流のほとり、三密を



避けてのささやかな宴会はそれなりに盛り上がっていた。

食後の散歩として、布目川の甌穴群^{おうけつぐん}を見学、笠置発15:28の電車で帰路についた。

参加者の皆さん、お疲れさまでした。そして楽しい一日をありがとうございました。